

## 色街の跡地探訪はツーリズムか？

Is “Iromachi” Site Visit a Tourism?

伊藤 寛幸\*1

ITO, Hiroyuki

新たな風俗が出現すると、過去の風俗に哀愁を幻視し普遍的価値を見出そうとする動きがある。色街もその例外ではない。公娼制度という社会システム研究や、遊郭特有の趣向・装飾が目を引き建築様式の意匠研究は、以前より学術分野ではみられた。最近では、それまで注視されてこなかった街並みについても、地域の開発がすすむとともに、失われゆく色街の跡地を歴史的遺構として保存する運動もみられる。さらに、これらの地域の資源を観光資源化しようとする試みもみられる。しかし、色街の跡地を研究対象とする動向はあっても、積極的に色街を訪問し、ことさら観光と強く結びつけようとする振舞いは少ない。したがって、これらの動向を対象としたツーリズム研究についても、緒に就いたばかりであり研究の蓄積も少ない。そこで、本稿では、色街の跡地を探訪する行為が、観光行動として成立しにくい要因などを探るとともに、その行為が、観光行動であるか否かについて論ずることを目的とする。

キーワード：色街、悪所、ヘリテージツーリズム、コンテンツツーリズム、ダークツーリズム

### 1 序論

本稿のタイトルにある「色街」とは、「遊興のために人々の集まる場所」のことである(注1)。色街を含む日本における風俗の大きな転換点は、近現代史上においては、「売春防止法」(1956年公布、1957年施行、1958年適用)と考える。日本国が法治国家である以上、法(売春防止法)の果たしてきた役割は大きく、社会環境が法によって大きく変化してきたことは紛れもない事実である。法整備および法制度の変遷にともなって、有形・無形にかかわらず、また、物質的・精神的にかかわらず、人々および社会に与えてきた影響は大きい。売春防止法の施行をうけ、それまで赤線と称されてきた地帯は1958年に廃止された。赤線地帯の廃止後も、合法・非合法を問わずさまざまな商売が、現在においても潜在化および顕在化している。売春防止法の施行以前は、公娼制度のもとで営業許可をえていた妓楼は、売春防止法の施行後は、特殊飲食店としてその業態をかえながらも営業を継続してきた経緯がある。しかし、時間の経過とともに、赤線地帯の風俗は、さまざまな商売の廃業にともない衰退の一途をたどることとなる。その間、色街の跡地を有する地域も、地域社会としての体裁は崩壊し機能不全に陥った。バブル経済を経て、過去に色街を有していた地域にも開発の波が押し寄せた。バブル経済のなか、これまで決して高値で取引されることはなかった地所も地価は高騰し土地売買は一気に進んだ。その後、色街の跡地は更地になり、さらにビルが乱立するなどその変容は劇的であった。時には区画整理をとめない街の姿を一変させるまでに再開発は進められた。景観などの物理的な条件や特徴はもとより、地域社会として再

---

\*1 北海商科大学

び次元の異なる機能不全に陥った時期といえる。

その後、過去に色街を有していた地域は、バブル経済の崩壊とともに衰退し、再び取り残されたかのような空間が再出された。こうしたなか、昭和から平成、そして令和を経て、失われた30年を経験してきた世代を中心に、色街を知る者もそうでない者にとっても、過去の風俗を懐かしむ風潮が高まった。新たな社会の風俗が出現すると、過去の風俗に哀愁を幻視し普遍的価値を見出そうとする動きである。色街もその例外ではない。公娼制度という社会システム研究や、遊郭特有の趣向・装飾が目を引く建築様式の意匠研究は、以前より学術分野ではみられた。また、それまで注視されてこなかった街並みについて、地域の開発がすすむとともに、失われゆく色街の跡地を歴史的遺構として保存する運動もみられるようになった。さらに、これらの地域の資源を観光資源化しようとする試みもみられる。しかし、色街の跡地を研究対象とする動向はあっても、積極的に色街をたずね歩くなど、ことさら観光と強く結びつけようとする振舞いは少ない。

本稿が分析の対象としている色街などを扱った著作物には、木村(2014)、八木澤(2017)などがある。ただし、本稿がテーマとする色街の跡地を探訪する行為を観光行動としてとらえ、ツーリズム研究にまで拡張した学術的資料を多数発見するまでには至らなかった。

こうした背景をふまえて、本稿では、色街の跡地を探訪する行為が、観光行動として成立しにくい要因などを探るとともに、色街の跡地を探訪する行為が、観光行動であるか否かについて論ずることを目的とする。仮に、色街の跡地を探訪する行為が、観光行動であった場合に、地域が執るべき有効かつ具体的な政策についても実践的含意を追究したい。

## 2 データと方法

### 2.1 分析対象とその周辺

#### 2.1.1 跡地を巡るツーリズムの諸相

跡地を巡るツアーは、特に最近の話題ではない。以前よりこれらの取り組みはあった。鉄道廃線跡巡り、城跡巡りなどがそれである。最近では、古戦場跡、著名人の旧居跡、廃校跡、廃坑跡、刑場跡など、その対象はかなり奥義に特化した領域にまで拡大している。このように、“巡る”対象については、没頭する個人に任せられているとあってよい。本稿が対象とした「色街」を含め「過去の痕跡」を「たずね歩く」行為とは、そこに「遺産」としての価値を見出し、「過去の所産」に対して敬意をはらおうとするあらわれである。

#### 2.1.2 定義および範囲

タイトルにある色街の語用法については、さまざまな概念がある。辞書および事典によっても、関連語や類語の解釈には差異がみられる(注2)。関連語や類語の一般化、定義の困難性、重要性については、丸岡(2011)によって、すでに論じられている。関連語や類語の一般化や定義の困難性はあるものの、ことばの成り立ちや背景を理解したうえで用いる必要はある。本稿では、これらの諸事情を十分に踏まえたうえで、関連語や類語などを広義多義にとらえ、「色街」という用語を適用する。広義多義にとらえることによって、誤解や差別なく議論をすすめたい。

色街の範囲を示す。地理的範囲については、地域を特定せず日本国内の情報・データを対象とする。ただし、戦前の植民地時代の外地におけるデータを例外的に参照している点に留意されたい。時間的な軸としては、江戸期および一部明治期にまで遡ることもあるが、分析の中心軸は売

表1 学術論文における色街の関連語・類語の検索結果

キーワード	検索件数	主要な分野
花街	222	
遊里	115	
遊郭	74	日本文学関連、日本史関連、人文地理学関連、文化人類学および民俗学関連、経営学関連、建築史および意匠関連、土木計画学および交通工学関連
赤線	42	
色街	23	
特飲街（特殊飲食街）	8	
妓楼	7	

注) 検索件数は、2020年4月17日現在の結果である。

春防止法の施行前後の現代史上の事象とする。

上記の定義と範囲をうけて、データを整理し分類を試みる。

はじめに、色街の関連語および類語として花街、遊里、遊郭などをあげ、それらの単語を CiNii (NII 学術情報ナビゲータ (注 3)) によってサーベイする。サーベイ結果について件数とともに掲載誌からえられる学術分野を抽出する。サーベイ結果を表 1 に示す。

データの整理および分類によりえられた知見を以下に示す。

- ・遊郭の成立や立地をみつかった歴史学・地理学、遊女を主人公に設定した文学、など人文科学系の分野がある。
- ・民俗学の立場から色街などの風俗をみつかった文化人類学など、社会科学系の分野がある。
- ・歴史的建造物をみつかった建築史、遺構をみつかった建築学および土木学など工学系の分野がある。
- ・人文科学系および社会科学系、さらに工学系などその適用分野は広い。したがって、色街を対象とした分析および評価には、学際的な方法論が強く求められるといえる。

## 2.2 諸分野からみた色街

データの整理および分類によってえた結果を参考に諸分野から色街をみる。

### 2.2.1 歴史上の色街

史料には、色街などを「悪所」ととらえる文献がある。色街などを「悪所」ととらえた文献の一例を表 2 に示す。なお、西村ほか (2008)、奥富 (2014) などは、「悪所」に関して、社会的要因に加え地勢的条件からの分析を試みている。

戦後史においては、1958 年に「売春防止法」が適用された。売春防止法の適用によって、公娼制度は表向きは廃止となり、売春は刑事罰の対象となって今日に至っている (南谷 (2012))。一方、売春防止法に基づき、社会環境の“浄化”等に関する啓発活動も展開されることとなった (藤田 (1993))。摘発や啓発活動によって、色街における特定の商売は、非合法かつ歓迎されない商売へと一変した。逆説的には、法の適用以前の色街における商売は、「合法」とみなされていた。

表2 色街などを「悪所」ととらえた文献

該当箇所	出展
芝居町、遊里ともに悪所として、幕府は隔離政策をとった。	下村ほか (1992)
廟は近世都市において「悪所」と呼ばれ蔑視されると共に周囲を堀や塀で囲われ、日常空間から社会的にも物理的にも隔離されていた。	田上ほか (2002)
江戸幕府は身分秩序を維持するため、遊里を悪所として隔離した(遊郭)。	岸田 (2012)

さらに、大阪の三大盛り場(梅田、千日前、新世界)は墓地跡に発達し、遊郭、色街(吉原、千住)も小塚原刑場や火葬場に、品川宿も鈴が森刑場に隣接した場所であることが、斗鬼(2001)によって指摘されている。いずれ(遊郭、色街、盛り場、墓地、刑場、火葬場)もNIMBY(注4)と形容される施設、場所、空間といえよう。

しかし、他方、遊郭は、喜見城、極楽浄土の側面をもつとともに、文化の発信地でもあったとの指摘もある(松原(1974)・斗鬼(2008))。

歴史上の色街に対するストロークは以下である。

- ・色街に対して、悪所や不浄などネガティブな負のイメージは多い。斗鬼(2011)、斗鬼(2013)が指摘しているように、性は、死、犯罪、廃棄物等と同様にあつかわれていた時期がある。特に、遊郭は、性というケガレを都市空間から排除し浄化する場であった。本来、遊郭は、カオスを清める浄化装置であったが、他方、穢れを引き受ける地でもあった。その後、穢れを引き受ける地は「穢れ」そのものになったものと推量される。

### 2.2.2 文学における色街

色街を舞台とした文学作品およびゆかりの色街を概観する。作品の一例およびその内容などを表3に示す。

さらに、テレビドラマ化、映画化など映像化された作品およびゆかりの色街を概観する。作品の一例およびその内容などを表4に示す。

最近では、色街がコミック、アニメに登場する機会も増えた。『さくらん』(注5)、『鬼滅の刃』(注6)などである。そのほか、色街が事件現場(注7)となったこともあった。その後、これらの事件は、コンテンツを通して描写・発信(注8)され、ひとびとの想像力が刺激され色街に対する妄想が拡大することとなった。

文学における色街では以下の点がポイントである。

- ・色街を知らない世代であっても、著名な文学受賞作品や教科書への掲載など、作品を通して色街を知る機会をえることができる。
- ・色街の文化を作品を通して昇華させた“洒落本などの遊里小説(注9)”というジャンルが存在するほど、色街と文学とのかかわりは深い。それは作家自身が、赤線や遊郭に頻繁に通うなどして、自ら色街とかかわりを深めていった証でもある。
- ・落語にも、廓話(「お見立て」、「明烏」)(注10)などがあり、色街と芸能とのかかわりも深い。

表3 色街を舞台とした文学作品およびゆかりの色街

作品	作家	時代とゆかりの色街	備考
たけくらべ	樋口一葉	明治中期 東京・吉原遊郭	高等学校国語教科書「現代文」に掲載
驟雨	吉行淳之介	昭和20年代後半 東京・新宿2丁目	第31回（1954年上半期）芥川龍之介賞受賞作
長崎ぶらぶら節	なかにし礼	明治期から 大正、昭和期 長崎・丸山遊郭	第122回（1999年下半期）直木三十五賞受賞作 映像化・舞台化されている。
吉原手引草	松井今朝子	江戸期 江戸・吉原遊郭	第137回（2007年上半期）直木三十五賞受賞作
漂砂のうたう	木内昇	明治初期 東京・根津遊郭	第144回（2010年下半期）直木三十五賞受賞作

出典) 木内 (2013)、新潮社 (2018)、なかにし (2003)、日本文学振興会 (2020a)、日本文学振興会 (2020b)、樋口 (1999)、松井 (2007)、吉行 (1966)

表4 映像化された作品およびゆかりの色街

作品	監督	公開年	配給	時代とゆかりの色街	原作等
墨東綺譚	豊田四郎	1960年	東宝	大正から昭和初期 東京・玉の井	永井荷風原作
五番町夕霧楼	田坂具隆	1963年	東映	昭和25年ごろ 京都・五番町遊郭	水上勉原作
四畳半襖の裏張り	神代辰巳	1973年	日活	大正中期 東京山の手の花街	永井荷風原作
陽暉楼	五社英雄	1983年	東映	大正から昭和初期 高知・玉水新地	宮尾登美子原作
吉原炎上	五社英雄	1987年	東映	明治後期 東京・吉原遊郭	斎藤真一原作

出典) 斎藤 (1987)、スティングレイ (2020)、永井 (1991)、日本映画製作者連盟 (2020)、丸谷 (1979)、水上 (1987)、宮尾 (1998)

注) 公開年は初作品の公開年を採用。

表5 特徴的な建造物およびそれらを有する色街

地域	特徴的な建造物	遊郭建築としての特徴
熊本県 八代市 旧紺屋町	料亭「黄金」	①二階には透かし彫りのある背の低い欄干が設えられておりファサードを特徴づけている。 ②二階の欄間には透かし彫りの“雁”や“月に蝙蝠”等の優雅な洗練された意匠で非日常的な雰囲気醸し出している。 ③二階の客用の座敷は中廊下の両側に4畳半～6畳間に分割された小部屋が並んでいる。 ④表階段と裏階段がある。 ⑤玄関は広く、玄関脇には貸座敷業時に張見世として使われた部屋がある。
	妓楼「新千寿」	総2階建、入母屋造り、数寄屋風の建物である。1階の窓にはすべて格子が入っている。中庭の大門通り側には数寄屋風の門がある。底は桧皮葺きで、2階にはね高欄が取り付けられ、雲肘木や、招き猫を象った隅肘木など、細部意匠が凝らされている。
愛知県 名古屋市 中村遊廓	妓楼「新山水」	総2階建て、切妻造りで、入口が正面にニカ所設けられている。西側の入口は楯が鳥居状になっており、東側はむくり破風の庇がついている。2階の屋根に意匠は少ないが、窓にガラスが使われており、1階には洋風の窓が用いられている。入口腰壁にタイルが用いられている。西側の玄関ホールは階段回りに数寄屋風の意匠が凝らされている。
	妓楼「銀波」	総2階建て、切妻造りで、ファサードが洋風にデザインされている。昭和初期にファサードを洋風に改装している。ファサードは1階に丸窓、2階部分中央に半円、左右に四分の一円の大きな硝子窓を配し、周囲を直線と円とによる幾何学模様の色硝子と、モザイクタイルで装飾しており、当時、カフェなどにも取り入れられていた表現主義モダニズムの影響を受けたものと思われる。

出典) 磯田ほか(2009)、近藤ほか(1996)

- ・色街が主な舞台となっている著名な文学作品の多くは、その後、映画やテレビドラマによって、映像化される機会にも恵まれ、広く大衆にリリースされる。映像コンテンツによって、色街ほか作中の舞台は、心象風景として人々に刷り込まれる。
- ・文学と色街との親和性が高い要因は、性描写が文学の重要不可欠な要素であり、これらの事象と空間は強く結節しているからと推量される。

### 2.2.3 建築・土木にみる色街

特徴的な建造物およびそれらを有する色街を概観する。建造物の一例およびその内容を表5に示す。

建築・土木にみる色街では以下の点がポイントである。

- ・色街は、非日常を遊興する場所であるがゆえに、異空間の演出が不可欠であった。透かし彫りの欄干や欄間、張見世など、一般住宅建築にはみられないすぐにそれと理解できる特異な様式を有していた。
- ・色街が過去の所産である現在において、色街を知らない世代にとっては、それらの建築様式

表6 三大遊郭にあげられている地域

地域	概要
元吉原 東京都中央区日本橋人形町	創立は元和3(1617)年、幕府の許可を得て庄司甚右衛門(しょうじじんえもん)が江戸市中に散在していた遊女屋を日本橋葺屋町(ふきやちょう)の東隣(現在の日本橋人形町周辺)に集めたことよりはじまる。次第に吉原が江戸の中心地となったため、明暦3年(1655)に現在地である千束村へ移転となった。以後、日本橋葺屋町辺にあった頃の吉原を「元吉原」、移転後の吉原を「新吉原」と称した。
新吉原 東京都台東区千束	
島原 京都府京都市下京区	官命により、寛永18(1641)年に島原の前身である「六条三筋町」から現在地の朱雀野に移された。正式地名は「西新屋敷」という。
新町 大阪府大阪市西区新町	大坂町奉行所が設置された元和五(1619)年に、又一町(後に瓢箪町)が公認遊所として設定された。寛永七(1630)年頃には新町へ移転される。これによって大坂唯一の公認遊郭が成立した。
古市 三重県伊勢市古市	外宮と内宮を結ぶ参宮街道沿いにあり、17世紀以降には芝居小屋、旅館とともに、伊勢随一の歓楽街としてにぎわった。
丸山 長崎県長崎市丸山町	寛永19(1642)年、市中に散在していた遊女屋を官命により1ヶ所に集めたのがはじまりといわれ、丸山は、丸山町と寄合町を合わせた花街の総称である。

出典) 伊勢志摩観光コンベンション機構(2016)、角屋保存会(2020)、長崎市(2014)、吉元(2013)、吉原神社(n.d.)

および意匠は、レトロ(回顧)、モダン(当世風)、ノスタルジー(郷愁)の印象が強く誘起される。

- ・保存にむけた安全性調査を通して、町家の文化遺産としての価値を求める営為がある(池本ほか(2008))。
- ・戦前に建築された妓楼跡(空き家)を資源ととらえリノベーションによって新しい価値を創造する試みがある(牛島(2018))。

#### 2.2.4 観光と色街

本稿の中心的課題である観光との関係性について概観する。色街の跡地が観光地および観光地化している地域を抽出する。

はじめに、近現代においてもいまなお「三大遊郭(注11)」と称される地区を概観する。森田(2004)によれば、三大遊郭とは、江戸の吉原、京都の島原、大坂の新町をさす。熟(2007)によれば、三大遊郭とは、江戸の吉原、京都の島原、長崎の丸山をさす。吉田(2009)によれば、三大遊郭とは、江戸の吉原、京都の島原、伊勢の古市をさす。さらに、江戸の吉原、京都の島原、伊勢の古市の三大遊郭に、大坂の新町、長崎の丸山を加え五大遊郭とするなど(神谷(2014))、三大を含めて固定的ではなく諸説唱えられている。それぞれの地区の概要を表6に示す。

いずれの地区も、三大遊郭の名を巧みに利用した地域ブランディングに成功している地区といえよう。その結果、観光地化されている地区として、現在も全国屈指の知名度を誇る歓楽街を形成している。

表7 著名な歓楽街を形成する知名度の高い地域

地域	協会・組合等	観光とのかかわり
すすきの 北海道札幌市中央区南4条、南5条から西3、西4丁目およびその周辺	すすきの観光協会	華やかな「花魁道中」が再現される「すすきの祭り」などの催事多数。
祇園 京都府京都市東山区八坂神社を中心とするエリア	八坂神社参道祇園商店街振興組合	日本三大祭りの一つ祇園祭は、観光行事ではないにもかかわらず、京都のイベントとして欠かせない行事である。
飛田新地 大阪府大阪市西成区山王3丁目一带	飛田新地料理組合	登録有形文化財に認定されている歴史を伝える重厚な建物（「鯛よし百番」）が旅行サイト（じゃらん（n.d.））旅行記が紹介されるなど観光地化が進んでいる。
中洲 福岡県福岡市的那珂川と博多川に囲まれたエリア	中洲観光協会・中洲町連合会	1243年に始まった博多祇園山笠ほか、博多どんたく、中洲祭りなど中洲がかかわる催事多数。

出典) じゃらん (n.d.)、すすきの観光協会 (2020)、中洲観光協会・中洲町連合会 (n.d.)、八坂神社参道祇園商店街振興組合 (2020)

表8 色街の跡地など関連する地域資源を観光商品化している事例

地域資源と観光商品	主催	場所	概要
江戸新吉原おいらん道中	一葉桜まつり・小松橋通り実行委員会、台東区馬道地区町会連合会	東京都台東区浅草：浅草寺の北側「一葉桜・小松橋通り」	毎年4月第2週の土曜日に開催される「浅草観音うら一葉桜まつり」の催しのひとつとして実施。
和のもてなし向島老舗料亭「櫻茶ヤ」	はとバス	東京都墨田区向島：老舗料亭「櫻茶ヤ」	浮世絵や芝居の舞台ともなった伝統ある向島花街に今なお残る料亭にて、本場の芸者踊りをみながら季節の会席料理を楽しむ企画。

出典) 浅草観音うら一葉桜まつり実行委員会 (2020)、はとバス (2020)

次に、現在、メディアなど各種媒体を通して、知名度は三大遊郭以上を誇り、観光地化が進んでいる地域がある。札幌のすすきの、京都の祇園、大阪の飛田新地、博多の中洲などである。それぞれの地域の概要を表7に示す。いずれの場所も、三大遊郭をしのぎ、市区町村の観光協会等とは別に独自の協会や組合を擁して組織強化を図りながら集客に努めている。

次に、色街の跡地など関連する地域資源が観光商品化されている事例および遊郭跡を散策する企画などについてインターネット検索結果の一部を表8、表9に示す。地名や従来からの呼称など、色街にまつわる地域資源を、観光資源化につなげ成功した好例といえる。



表9 色街の跡地などを散策する企画事例

タイトル	サイト運営	場所	概要
魅力再発見！花街風情が残る古町をぶら歩き	公益社団法人新潟県観光協会	新潟市古町エリア	小路に足を踏み入れれば現在もその風情が残り、地元で愛され続ける老舗が多く、趣のある時間を過ごせるスポットの紹介サイト。
花街ぶらぶら日帰り散歩	長崎県観光連盟長崎県文化観光国際部観光振興課	長崎市丸山界限	なかにし礼氏原作の映画「長崎ぶらぶら節」の舞台にもなった花街跡・丸山界限を中心に、思案橋、丸山公園、史跡料亭花月、長崎検番、梅園見返り天満宮、中の茶屋を巡るモデルコースの紹介サイト。

出典) 新潟県観光協会 (n.d.)、長崎県観光連盟長崎県文化観光国際部観光振興課 (2020)

観光と色街では以下の点がポイントである。

- ・色街の観光地化とは、色街の大衆化を意味する。すなわち、これまでの社会通念上の慣例地（注12）という空間が、法という名の社会制度資本によって“解放”されたことを意味する。加えて、地域のブランディング化も進み、性別、年齢などの隔てなく、誰しものが、その“異界への旅”が許されたことによるところが大きい。“異空間への移動”が可能となるなど、色街の跡地が“開放”されたことを形容している。

### 3 考察

データ整理等からえられた結果を以下にまとめる。

- ・明治期以降の、特に第2次世界大戦前（売春防止法の施行前）の近代日本において、色街などは、その存在が強く否定されることはなかった。それは、色街の多くが社会制度上容認されていた合法的な官許エリアであることによる。
- ・歴史的には、色街などを総じて悪所などと称してきた経緯がある。
- ・学際的な文脈においても、色街を悪所として忌避する表現が、いまなおみられる。
- ・色街が悪所との認識のなか、猥雑な空間でありながらも、一方で、色街が喜見城などの異名もある。
- ・色街と文学、芸能とのかかわりは深い。
- ・異界の空間に学術的価値を見出し、失われつつある遺構を保全する活動がある。
- ・色街の跡地は、遺構としての認識のもと、旅館や飲食店などとしてリノベーションによる保全の動きがある。
- ・色街の跡地における花魁道中や、色街の跡地の老舗店舗を利活用した飲食など、色街の跡地等が観光産業とむすびつく事例がある。
- ・売春防止法の施行後においても、色街の跡地を異界、異空間としてとらえ、レトロ（回顧）、モダン（当世風）、ノスタルジー（郷愁）といった表現のもと、その跡地を「たずね歩く」行動は以前より存在した。色街の大衆化によって、現在、再び、世代や性別を超えた色街の跡

地探訪ブームの兆しがある。まさに、“異界への旅”、“異空間への移動”である。

- ・色街の跡地の地域資源としての価値を認める一方で、すべての色街の跡地が観光資源につながるわけではなく、色街の跡地を取り巻く社会的、文化的小よび物理的な環境には大きな地域差がみられる。

#### 4 結論

本稿では、色街の跡地を探訪する行為が、観光行動として成立しにくい要因などを探るとともに、色街の跡地を探訪する行為が、観光行動であるか否かについて論ずることを目的とした。

アプローチによってえられた本稿の結論を述べる。

色街の跡地を探訪する行為が、観光行動として成立しにくい要因は以下である。

- ・色街が、成立過程において「悪所」とされてきたことによる心理的抵抗にその要因があると推察される。「悪所」をあえて観光資源化することへのためらいが観光商品化の妨げとなっていると推量される。自ずと、従来からの物見遊山的な観光行動とは趣が異なる結果となる。
- ・しかし、一方で、色街を喜見城などと称して、その存在は容認されてきた実態もある。

次に、色街の跡地を探訪する行為が、観光行動であるか否かについては以下である。

- ・色街の跡地すべてがその対象ではないが、一部の著名な色街の跡地に関しては、現在では悪所のイメージは少ない。時間の経過とともに、色街の跡地は悪所ではなく、地域の浄化も進み、悪所は過去のものとなれ、レトロ（回顧）、モダン（当世風）、ノスタルジー（郷愁）といったことばのもとで観光資源化が進んでいる。したがって、色街の跡地を探訪する行為は、観光行動であるといえよう。

さらに、本論の結果から導かれる政策的含意は以下である。

- ・色街の跡地を探訪する行為は、文学作品とのかかわりが深いことから、コンテンツツーリズムとしてのアプローチも可能である。さらに、妓楼などの遺構とのかかわりが深いことから、ヘリテージツーリズムとしてのアプローチも可能である。すなわち、コンテンツツーリズムおよびヘリテージツーリズムなど、重層的かつ複眼的な接近により、明確な観光目的化のもとで、細分化した観光商品開発をすすめることもひとつの戦略となろう。
- ・観光の原点である非日常に、色街の異日常を加え、時空を超えた異空間演出なども有効な戦略となろう。
- ・仮に、色街を歴史上の遺産として悪所にとらえ、その跡地をたずねる行為をあえて観光行動と結節するならば、その行動はダークツーリズムに内包される。
- ・色街が歴史学、文学、建築学など、広く学際的な解決を擁する分野であることから、分析や評価においては、総合科学としての側面をもつ観光学がもっとも適している分野ともいえる。したがって、失われゆく色街の跡地を記憶のみにとどめることなく、正しい歴史認識のもとで当時の社会制度もひとつの制度資本としてとらえるなど、今後は、色街の跡地への探訪を、観光学からのアプローチによって学際的に幅広く探求していきたい。

#### 注

注1) 椎野（2011）による。関連語および類語については、次章であつかう。

注2) 本稿であげた「色街」と「色町」、「遊郭」と「遊廓」のように、同音であり意味が類しなが

らも表記に相違があるなど、その取扱いには留意が必要である。

特に、「花街」と「遊郭」の相違点については以下である。角屋保存会（2020）によれば以下である。角屋保存会（2020）を引用する。【明治以降の歓楽街は、都市構造とは関係なく、業務内容で「花街」と「遊郭」の二つに分けられました。「花街」は歌や舞を伴う遊宴の町であり、一方、「遊郭」は歌や舞もなく、宴会もしない、歓楽のみの町であります。島原は、囲郭的な都市構造でしたが、業務内容は歌舞音曲を伴う遊宴の町で、単に遊宴だけを事とするものではありません。】

一方、椎野（2011）によれば関連語および類語は以下である。椎野（2011）を引用する。

【「遊里」とは、遊女のいるところ、いろざと、くるわ、遊郭のことである。「いろざと（色里）」とは、いろまち（色町・色街）のことで、遊女屋や芸者屋が集まり、遊興のために人々の集まる場所、花柳街、くるわ（郭）である。遊郭とは、多数の遊女屋が集まっている一定の地域、（明治以後は、）貸座敷営業が許された地域、のことである。花柳街（花柳界）とは、芸者や遊女のいる町、芸者町、花街、はなまち。花柳とは、花街柳巷の略で、芸者や遊女または遊里や遊郭のことである。】

他方、竹中（2007）によれば関連語および類語については以下である。竹中（2007）を引用する。【『日本国語大辞典』によれば、花街とは「遊女屋、芸者屋などの集まっている所。花柳界。遊里。色里」のことである。日本で出ているほぼすべての辞書でこの『日本国語大辞典』とほとんど同じ説明がされている。しかし、異なった定義の仕方もある。たとえば花街とは置屋・料亭・待合という3つの業種からなる三業地のことであるといった分業体制からみた説明である。さきほどの辞書的な説明が、現状の花街の説明としては問題があるのに対して、こちらの説明は現存する花街の解説として妥当であり、花街関係者の同意も得やすいと思われる。その理由は本論文を通して明らかになるだろう。さしあたり京都の場合、花街とは芸妓・舞妓を育てる置屋と、芸妓・舞妓が派遣される茶屋（貸座敷）の2種類の業種からなる二業地を意味する。したがって花街とは舞妓・芸妓という商品を流通させている空間であり、この商品のイメージがもっとも重要となる。】

なお、本稿が参考とした八木澤（2018）では、遊郭をはじめ、茶屋、岡場所、私娼窟、赤線、青線、特飲街などを扱っている。これらを網羅して文献のタイトルを「色街」と称している点を鑑み、本稿でも、これらの語用法を参考としている。

以上のように、定義や分類自体が研究対象となるなど、多数の関連語および類語があるため、使い方と解釈には留意が必要である。

注3) CiNiiとは、インターネットによる論文、図書・雑誌などの検索サービスである。

注4) NIMBYとは、Not In My Back Yard（＝我が家の裏庭にはお断り）の頭文字による頭字語である。恩恵は享受しながら迷惑施設の立地には反対する人々に対して、アメリカ原子力協会のWalter Rogersなる人物が、1980年に放った揶揄に起源を持つとされる新造語である（鈴木（2016））。

注5) 原作：安野モヨコ。掲載媒体：イブニング。連載時期：2001年～2003年。あらすじ：江戸・吉原遊郭を舞台に、遊女・きよ葉が、吉原一の売れっ子花魁・日暮となり、一人の青年と恋に落ちる物語（安野モヨコデビュー30周年記念（2020））。その後、映画実写化（監督：蜷川実花、配給：アスミック・エース、公開：2007年）された。

- 注6) 原作：吾峠呼世晴。掲載媒体：週刊少年ジャンプ。連載時期：2016年～2020年5月現在連載中。内容：人と鬼との切ない物語に鬼気迫る剣戟、時折コミカルに描かれるキャラクターたちが人気を呼び、単行本1巻～19巻で累計発行部数が4000万部を突破。注目を集め異彩を放つ。独自の世界観を構築し続け、新たな少年漫画の金字塔として存在感を示している（鬼滅の刃（2020））。8巻から11巻において吉原遊郭が作中に登場する。
- 注7) いわゆる阿部定事件の東京都荒川区尾久三業地（中澤（1999））が事件現場およびゆかりの地として該当する。
- 注8) 阿部定事件をあつかった映画（（監督：田中登『実録 阿部定』、製作：1975年、配給：日活）（監督：大島渚『愛のコリーダ』、製作：1976年、配給：東宝東和））がある。
- 注9) 洒落本とは、延享年間（1744～1748）から文政年間（1818～1830）にかけて、初めは上方、後には江戸を中心に刊行された一種の遊里小説である（森（2019））。
- 注10) 落語のススメ（2020）による。
- 注11) 中国古代の陰陽思想のもと、奇数を尊ぶ概念から名数の三を好む傾向がある。いずれも日本を代表するにふさわしい花街である。なお、遊郭という実態がないにもかかわらず、現代においても「遊郭」と称している地区は、本来は「遊郭跡」と称されるべきである。しかし「遊郭」も「遊郭跡」も同義として使用する。
- 注12) 竹中（2007）による。

#### 【引用文献】

- 池本敏和・小林史彦・後藤正美・鈴木祥之（2008）「重要伝統的建造物群保存地区における茶屋街建物の動特性」『歴史都市防災』2、pp.155-162.
- 伊勢志摩観光コンベンション機構（2016）「伊勢志摩事典」、伊勢志摩観光コンベンション機構.
- 磯田節子・田島秀一・原田聡明（2009）「八代紺屋町の遊郭建築「黄金」について」『熊本高等専門学校研究紀要』1、pp.53-60.
- 牛島朗（2018）「地方都市における空き家活用の可能性：一山口県下関市新地地区の事例を通して」『都市住宅学』100、pp.122-123.
- 奥富小夏（2014）「蘇る江戸東京の岡場所」『法政大学大学院紀要. デザイン工学研究科編』3、pp.1-7.
- 神谷勝広（2014）「伊勢古市の備前屋と江戸文芸-山東京山・大田南畝-」『日本文学』63（2）、pp.12-19.
- 木内昇（2013）『漂砂のうたう』集英社。（集英社文庫）
- 岸田秀樹（2010）「曾根崎心中の歴史社会的分析 -書評；小林恭二著『心中への招待状・華麗なる恋愛死の世界』」『藍野学院紀要』24、pp.75-87.
- 木村聡（2014）『色街百景：定本・赤線跡を歩く』、彩流社.
- 近藤正一・早瀬幸彦・麓和善・若山滋（1996）「中村遊廓における建築計画の類型」『日本建築学会計画系論文集』61（488）、pp.203-210.
- 斎藤真一（1987）『吉原炎上（文春文庫）』文芸春秋.
- 椎野信雄（2011）「遊びとゲーム：遊びの貧困の所以」『湘南フォーラム：文教大学湘南総合研究所紀要』15、pp.27-41.

- 下村彰男・江頭俊昭（1992）「近世における遊楽空間の装置性に関する考察」『造園雑誌』55（5）、pp.307-312.
- 鈴木晃志郎（2016）「「景観紛争の科学」で読み解く太陽光発電施設の立地問題」『地域生活学研究』、7、pp.84-94.
- 田上仁志・木下光・丸茂弘幸（2002）「江戸期における大坂新町の空間構成に関する研究」『都市計画論文集』37、pp.487-487.
- 竹中聖人（2007）「花街の真正性と差異化の語り ―北野上七軒と五番町をめぐって」『Core Et hics』3、pp.249-259.
- 斗鬼正一（2001）「都市にうつした海--銭湯の都市人類学」『東京湾学会誌』1（5）、pp.145-152.
- 斗鬼正一（2008）「橋から見た都市」『情報と社会』18、pp.11-19.
- 斗鬼正一（2011）「都市というパラドックス--江戸の都市空間と人」『情報と社会』21、pp.185-199.
- 斗鬼正一（2013）「都市の境界的空間と文化の革新、創造：浅草の文化人類学的研究」『江戸川大学紀要』23、pp.223-244.
- 永井荷風（1991）『遷東綺譚（岩波文庫）』岩波書店.
- なかにし礼（2003）『長崎ぶらぶら節（新潮文庫）』新潮社.
- 中澤千磨夫（1999）「阿部定年譜（予審訊問調書による）」『北海道武蔵女子短期大学紀要』31、pp.21-52.
- 西村亮彦・内藤廣・中井祐（2008）「近代東京における花街の成立」『景観・デザイン研究講演集』4、pp.300-307.
- 樋口一葉（1999）『にごりえ；たけくらべ（岩波文庫）』岩波書店.
- 藤田雅子（1993）「売買春は婦人保護から人権の問題へ」『生活科学研究』15、pp.26-53.
- 松井今朝子（2007）『吉原手引草』幻冬舎.
- 松原秀江（1974）「西鶴「一代男」の好色」『待兼山論叢』7（文学篇）pp.1-21.
- 丸岡裕美（2011）「トポスとしての「遊郭」--長崎丸山の意味論的変容をてがかりにして」『文化環境研究』5、pp.57-66.
- 丸谷才一（1979）『作家の証言：四畳半襖の下張裁判（朝日選書）』朝日新聞社.
- 水上勉（1987）『五番町夕霧楼（新潮文庫）』新潮社.
- 南谷覺正（2012）「戦後日本の性とメディア」『群馬大学社会情報学部研究論集』19、pp.55-74.
- 熟美保子（2007）「書評 山本博文監修『ビジュアル NIPPON 江戸時代』」『女性学評論』21、pp.149-155.
- 宮尾登美子（1998）『陽暉楼（文春文庫）』文藝春秋.
- 森勇太（2019）「近世後期洒落本に見る行為指示表現の地域差 - 京・大坂・尾張・江戸の対照 -」『日本語の研究』15（2）、pp.69-85.
- 森田雅也（2004）『「色里三所世帯」と京都・大坂・江戸--西鶴と貞享期の読者の三都意識をめぐって』『日本文芸研究』55（4）、pp.25-46.
- 八木澤高明（2017）『色街遺産を歩く：消えた遊郭・赤線・青線・基地の町』、実業之日本社.
- 八木澤高明（2018）『江戸・東京色街入門』、実業之日本社.
- 吉田春生（2009）「温泉新時代の本質（1）」『地域総合研究』36（1・2）、pp.13-26.

吉元加奈美 (2013) 「近世大坂における遊所統制：町触を素材に」『都市文化研究』15、pp.13-27.

吉行淳之介 (1966) 『原色の街；驟雨 (新潮文庫)』新潮社.

#### 【引用サイト】

浅草観音うら一葉桜まつり実行委員会 (2020) 「浅草観音うら一葉桜まつり」 (<https://www.ichiyosakura.com/>) [2020年4月29日参照].

安野モヨコデビュー30周年記念 (2020) 「さくらん」 (<https://annomoyoco.com/comics/sakuran/>) [2020年5月1日参照].

鬼滅の刃 (2020) 「鬼滅の刃とは」 (<https://kimetsu.com/about/>) [2020年5月1日参照].

じゃらん (n.d.) 「DEEP Osaka! 飛田新地」 (<https://www.jalan.net/travel-journal/000023854/?screenId=OUW1701&influxKbn=0>) [2020年5月3日参照].

新潮社 (2018) 「新潮文庫 高等学校国語教科書 採用作品一覧 平成30年度」 ([https://www.shinchosha.co.jp/edu/download/high-school\\_2018.pdf](https://www.shinchosha.co.jp/edu/download/high-school_2018.pdf)) [2020年5月1日参照].

すすきの観光協会 (2020) 「すすきの祭りの歴史」 (<http://www.susukino-ta.jp/history/index3.html>) [2020年5月1日参照].

スタンディングレイ (2020) 「allcinema」 (<https://www.allcinema.net/>) [2020年5月2日参照].

角屋保存会 (2020) 「島原の文化史」 (<http://sumiyaho.sakura.ne.jp/page/history.html>) [2020年5月3日参照].

長崎市 (2014) 「ながさき花街丸山伝 「ナガジン」 発見！ 長崎の歩き方」 (<http://www.city.nagasaki.lg.jp/nagazine/hakken1009/index.html>) [2020年5月3日参照].

長崎県観光連盟長崎県文化観光国際部観光振興課 (2020) 「ながさき旅ネット モデルコース 花街ぶらぶら日帰り散歩」 (<https://www.nagasaki-tabinet.com/course/60038/>) [2020年5月6日参照].

中洲観光協会・中洲町連合会 (n.d.) 「中洲について」 (<http://www.nakasukankou.com/about.html>) [2020年5月4日参照].

新潟県観光協会 (n.d.) 「新潟観光ナビ>魅力再発見！花街風情が残る古町をぶら歩き」 (<https://niigata-kankou.or.jp/feature/furumachi/top>) [2020年5月6日参照].

日本映画製作者連盟 (2020) 「映連データベース」 (<http://db.eiren.org/>) [2020年5月2日参照].

日本文学振興会 (2020b) 「直木賞受賞者一覧」 (<https://www.bunshun.co.jp/shinkoukai/award/naoki/list.html>) [2020年5月1日参照].

日本文学振興会 (2020a) 「芥川賞受賞者一覧」 (<https://www.bunshun.co.jp/shinkoukai/award/akutagawa/list.html>) [2020年5月1日参照].

はとバス (2020) 「東京観光 > 和のもてなし向島老舗料亭「櫻茶ヤ」」 ([https://www.hatobus.co.jp/app/search/course\\_detail/index?c\\_code=R288&s\\_date=20150101](https://www.hatobus.co.jp/app/search/course_detail/index?c_code=R288&s_date=20150101)) [2020年4月29日参照].

吉原神社 (n.d.) 「新吉原にて」 (<http://yoshiwarajinja.tokyo-jinjacho.or.jp/yoshiwara00.html>) [2020年5月3日参照].

落語のススメ (2020) 「遊郭を題材にした古典落語 初心者にもおすすめ！ 廓話3選」 (<https://raku.go.xyz/koten-kuruwa/>) [2020年5月1日参照].

八坂神社参道祇園商店街振興組合（2020）「祇園祭のお話」（<https://www.gion.or.jp/gionmatsuri/>）  
〔2020年5月1日参照〕.

（2020年5月16日受理）